関西自然保護機構会報 *21*（*2*）：*93－94*，　*1999*

巻　頭　言

西の湖のスゲ

大阪市立自然史博物館　藤　井　伸　二

AN ESSAY OF *CAREX* LEAVES "SUGE"

Sinji Fujii　*Osaka Museum of Natural History*

1999年6月29日，滋賀県で行われた国際ワークショップのフィールド・エクスカーション（西の湖の水郷を屋形船で巡る）で近江八幡市円山町を訪れたときのことである。エクスカーション終了後，照りつける日差しの中をいつもの調査場所をまわってから，再び立ち寄った船着き場で図1，2のような光景に出会った。

夕刻の午後4時を過ぎた船着き場では客足が途絶えてひっそりとした落ち着きを取り戻していた。客のいない休憩所を利用して地元の女性二人がスゲの葉を束ねている。不思議に思って尋ねてみると，「ちまきを縛る紐として使う」との返事が返ってきた。ちまきにはヨシの葉を使うが，それを縛るのにスゲの葉がいいとのことである。さらに「ちまきを包む葉は香りのよい当年のヨシの葉を使うが，縛る紐は前年に収穫して保存しておく。当年のスゲだと短かくて使えないから来年の分を今時分に集めている」と教えてくれた。

円山町周辺ではオニナルコスゲとカサスゲ，それにアゼスゲ，アゼナルコスゲなどがみられるが，前2種の優占度がとくに高い。二人の女性が集めていたスゲはオニナルコスゲかカサスゲのどちらかであることは間違いなかったが，果穂を欠いた状態なので同定はできなかった。

琵琶湖周辺に散在する多数の内湖（琵琶湖本湖に隣接する浅い沼沢地の総称，西の湖は現存する最大の内湖である）は，ヨシ原をはじめとする低湿地環境の多様性に関して特筆すべき存在であったらしい。しかし，1940年代半ばから始まった干拓事業により1970年頃には大部分が埋め立てられた（倉田，1984）。琵琶湖最大の内湖であった大中之湖は干拓によって消滅したが，隣の西の湖の干拓計画は地元のヨシ生産者らが猛反対して実現させなかった経緯がある（里内，1991）。その結果，現在の琵琶湖およびその周辺環境の中でも最大規模のヨシ原が保存され，よしずの生産は現在も行われている。ヨシ刈りとヨシ焼きは円山地区の冬～早春にかけての風物詩だ。

私はこれまでマコモ刈りやヨシ葺き屋根といったヨシ原と人との関わりを「私のフィールドノートから」というシリーズで紹介したことがある（藤井，1996，1997）。今回出会った「ちまきの紐」もヨシ原とともに生きる生活がまだまだ健在なことを教えてくれた。なによりも，地元の方たちがヨシ原の自然と関わり合いを持って生きていること，来年のために収穫するという穏やかな時の流れに身をゆだねていること，そしてそれらのことが「ちまき」というささやかな生活習慣を通して今も生き続けていることを発見して，幸せな気持ちに浸ることができた。私のぶっきらぼうな質問に笑顔で答えてくれた二人の女性に感謝したい。

引用文献

藤井伸二. 1996. 私のフィールドノートから 16 ヨシ葺きの屋根. Nature Study 42(7) : 7-8.

藤井伸二. 1997. 私のフィールドノートから 20 牛久沼のマコモ刈り. Nature Study 43(3) : 10.

倉田　亮. 1984. 内湖－その生態学的機能－. 琵琶湖研究所所報 2 : 46-54.

里内　勝. 1991. 西の湖の水質と物質収支. 滋賀県自然誌総合学術調査研究報告. 滋賀県自然誌編集委員会編集. 滋賀県自然保護財団. 1901-1924.

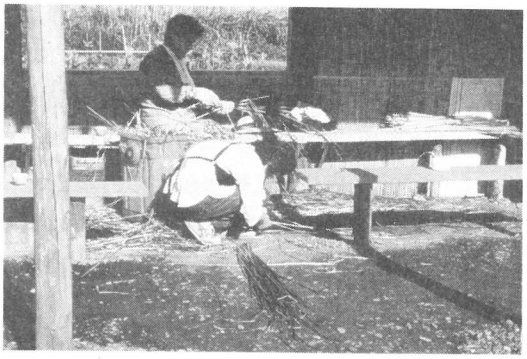


図 1　スゲ属の一種（カサスゲかオニナルコスゲと思われる）**を束ねる女性**（1999 年 6 月 28 日，近江八幡市円山町の水郷巡り船着き場で）.

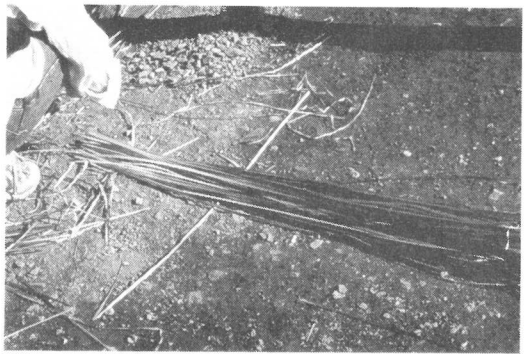


図 2　束ねる前のスゲの葉. これが一束になる（撮影データは図 1 に同じ）.